

「名前で呼んでよ」

「な!？」

見上げる目が、悪戯っぽく笑う。頬に微かな紅潮を滲ませた風に挑発され、情けないほどにしどろもどろになってしまう。

名前呼び。そんな状況も、想定しないわけではなかった。正直に言えば、何度か予行練習したことさえある。だが、いざ本人を目の前にしてしまえば、どうにも舌が上手く回らない。

「な、な、ななっ、な」

意図せずスタックカートを刻んでしまうたびに、頭に血が昇る。初手から無様すぎて、いっそ布団を引っ被って不貞寝してしまいたい。だが、春山は茶化することなく、じつと湊を見据えている。

膝の上で、固く拳を握った。大きく息を吸って、吐いて、もう一度吸って。

「……な、……ぎ」

たった二文字を口にするだけで、これだ。名前で呼ぶことすらスマートにこなせない。それが鈴木湊という男の正体だ。底なしの自己嫌悪に駆られるも、

「うはー、照れるね」

自分から煽っておいて、春山、いや、風は気恥ずかしそうに笑う。日頃は物怖じという言葉とは無縁な風が見せた羞恥に、募りに募った愛おしさが頂点を突き抜け、

「風……!!」

「あ、ちょっと待って」

あっさり躲された手が、すかっと虚空を抱く。両手を持て余す湊を他所に、風は旅行リュックからいそいそと何かを取り出すと、

「ごめん、一旦降りてもらっていい？」

湊を布団から追いやり、敷布団に防水シートを敷き始める。

「……何してる？」

「え？ だって汚したらまずいじゃん。そっちの角やって、湊くん」

「仕事できる奴だな、お前は……!」

「もっと褒めてくれていいよ？」

雰囲気は台無しにも程があるが、つまりはシートが汚れるほどの行為に、これから及ぶのだ。二十九歳童貞にしてみれば、頭がどうにかなりそうだった。

——いいか、落ち着け。落ち着くんた。まだキスどころか、触ってもいないんだぞ。懸命に平静を装う中、ぱちりと照明が落とされた。座敷に灯っているのは、行燈を模した間接照明だけだ。

「……湊くん」

薄暗がりの中、凧は湊の肩へ頬を埋めてきた。人の重みとシャワーを浴びたばかりの温もりを直に当てられ、危うく叫びそうになる。

——何故、そんなにぐいぐい来られるんだ、こいつは。恥じらいとかないのか。

かといって、押し返すこともできかねた。震える手を、凧の背中へ回していく。木綿一枚に覆われた、なだらかな肩甲骨の感触が、かえって生々しく感じた。

恐る恐る抱き寄せれば、長く恋焦がれていた男と胸を重ね合わせる形になる。ばくばくと無様に爆ぜる鼓動が伝わらないかと焦るうち、

「ん……」

微かな吐息を首元に感じる。ぞくりと甘い刺激が走った背中に、掌が二つ、触れる。そのまま強く抱き返されて、体がより密に接し合う。

初めて、男の体を知った。直線的なライン、しなやかな筋肉。湊より数cmほど低い

頭が、肩口にもたれかかってくる。何度も妄想した風という存在が、現実の肉体を伴って懷に収まっている。突き抜ける多幸福感に、どうにかなってしまいうだった。

昂りを抑えて、息を吸う。シャワーを浴びた首筋から立ち上る仄かな匂いは、陽だまりのそれに似ていた。

シャンプーでも整髪料でもない、風自身の匂い。感じてしまえば、下腹部がずきりと疼く。

生唾をぎゅりと飲み込んで、体を離す。下へ僅かに傾けた目が、愛嬌に切なさを忍ばせた垂れ目と合う。右の掌を風の頬へ当て、

「風」

掠れた声で、大切な名を呼んだ。

風は口角を緩めて、目を閉じた。湊も目を閉じ、優しい笑みを滲ませる口元へ、眼鏡が当たらないよう細心の注意を払いながら、微かに震える唇を近づけて。

それが柔く温かく、そして幸福だということを、知った。

唇を離すまでの数秒が、永遠に思えた。だが、心地良い酩酊感に浸っていられた時間は、僅かだった。

——今ので、良かったんだろうか。気色悪いって引かれていないだろうか。もしかして、舌も入れるべきだったのか。このキモヘタレアラサー眼鏡とか思ってるんじゃないだろうかいつ、いや、間違いなく思ってる。

恐る恐る、瞼を開く。視界に映ったのは風の呆れと軽蔑が混じった眼差し、ではなく。

陶然と蕩けた二重の垂れ目が、湊を眺めていた。

「……好きだよ、湊くん。大好き」

上擦った声で囁かれるなり唇を塞がれた、刹那。

理性が、弾けた。

柔らかな髪が覆う後頭部を左手で押さえるなり、舌を掬い込んだ。風も待ち望んでいたかのように迎え入れられて、舌と舌がもどかしげにもつれ合う。

くちゅ、ぐちゅ、と掻き回された唾液の濡れた音が、夜の座敷に響く。湊の舌を舐め、時に吸い上げる生々しくも官能的な感触を知ってしまったえば、インターネットで学んだ付け焼き刃の『作法』など一瞬で吹き飛んだ。吐息を乱し眼鏡をぶつけながら、何度も何度も風を貪った。

